

秋桜花

第一三号第二刷

二〇一六年五月一五日 ペンテコステ 創立記念日



イースターには子どもたちも
集まりました

説教

神のものは神に返せ

ルカによる福音書二〇・二〇～二六

早坂 文彦

「わたしたちが皇帝に税金を納めるのは、律法に適合しているでしょうか、適っていないでしょうか。」この問いは、当時のユダヤ人にとって重要な問題でした。ユダヤという小さな国はローマ帝国の属国で、自分たちの国に納める税だけでなくローマに納める税が課せられていました。これをめぐってユダヤ人の間では国を二分する論争があったのです。一方の人々は、自分たちは神に仕えるべきで、ローマに仕えるべきではないのだから、税を納めるのはもつてのほかだ、と考えました。この人々を熱心党と言い、過激な思想を持ち武器を取ることも厭わないという人々でした。後にこの考えが優勢となり、西暦66年に戦争になります。もう一方の考えは、もつと穏健なパリサイ派の人々のもので、ローマと協調して平和にやっつていこうというもので、税金を納めるのも致し方ないと主張しました。この時点ではこちらの考えが優勢でした。ですから、イエス様に向けられた税金に関する問いは、当時の人々にとってまじめな問だったのです。

ところがイエスを殺そうと謀る指導者たちは、この質問を、イエスを罠にかけるための手段にしました。この質問自体は深刻な質問でしたから、「正しい人を装う」(20:20)ことは簡単でした。税を納めてもよいと言えば、民衆はイエスに失望するでしょう。特に熱心党とその支持者たちはイエスから離れていくでしょう。逆に、納めてはいけなと言えはどうなるでしょう。ローマに反逆する者として、逮捕し、ローマに引き渡し、死刑に処することができるのです。これま

でのイエスの言動やイエスに対する民衆の支持を思えば、こちらの答えが返ってくる可能性が高かったのです。このことを見越して、回し者たちは、「あなたのおつしやることも、教えてくださることも正しく、また、えこひいきなしに、真理に基づいて神の道を教えておられることを知っています。」(20:21)と言います。もしイエスがごまかすような答え方をすれば、目ごろの確信に満ちた姿勢と違うじやないかということになり、これもまた民衆の支持を失うこととなります。逃げるができないように、あらかじめ布石を打つ、実に巧妙なやり方です。

これに対するイエス様の答えは見事なものだったと聖書は記します。週報の表紙にも印刷しましたが、「カエサル」つまり「皇帝」という意味の文字とともに、その肖像の刻まれた銀貨を持つてこさせ、「皇帝」つまり「カエサルのものはカエサルに、神のものは神に返しなさい。」(20:25)とおっしゃいました。当然イエスは、神に仕え神殿のみに税を納めよと言うであろうと期待していた人々の目の前に、銀貨を示して、人々がそれで生活しその恩恵を受けているという現実を、まざまざと思い起こさせました。恩を受けておりながら仇で返すことはできないわけです。

これによって回し者たちは、「イエスの言葉じりをとらえること」ができなかったと聖書は言います。このイエスの返答は、見方を変えれば、「あなたは神に恩恵を受けているのか、それとも皇帝の恩恵を受けているのか。あなたは自分でどちらだと考えるのか。問題はあなた次第ではないのか。」と逆に問いを投げ返しているということでもあります。これはある意味、はぐらかしではないでしょうか。結論は自分で考えなさいということですから。なるほどそれも、政治的な駆け引に明け暮れ、人間同士の思い計らいだけで生活していた人々を、神の前に立たせるといふ効果はあったでしょう。けれどもイエスは直接には答えていないわけで

す。ある意味、「逃げ」です。非常に巧みに攻撃をかわしているという、それだけのことではないでしょうか。そして、もし逃げであったのなら、遣わされた回し者は、「いいえ、私たちは、あなたの考えを聞きたいのです。」と言いきることもできたはずですが、けれども彼らは、「その答えに驚いて黙ってしまった」(20:26)のでした。びっくりして言葉も出ない、そういう状況です。そこには、彼らが押し黙らざるを得ないような何か、彼らの胸を貫くような何かがあったのです。

イエスの言葉には、人々をして自分が思ってもいなかったような地平に立たせるものがあります。それは「カエサルのもものはカエサルに、神のもものは神に返しなさい。」(20:25)という、この言葉の中に隠されています。注目すべきは、「返す」(ギリシヤ語で「アポデイドマイ」という言葉です。イエス様は、回し者の言葉、「納める」(これはデイドマイと言います)を「返す」(頭にアポを付けてアポデイドマイ)に変えているのです。「デイドマイ」というのは「与える」という意味です。

つまりどういうことかという、人々は税を納めることで、「与える」側に立っていたのです。自分ほどちらに加担するのか、祖国とローマと、どちらに力を貸すのか、と。これは自分にはたとえいくばくかでも、力があると思っている人の考えです。基本、自分のものは自分のものだと考えているのです。けれどもイエス様は、「本当にそうなのか？」と問うのです。

パウロはコリントの信徒への手紙の4章7節でこう言っています。「いったいあなたの持っているもので、いただかなかったものがあるでしょうか。もしいただいたのなら、なぜいただかなかったような顔をして高ぶるのですか。」イエス様が、「返す」とおっしゃったときに、そこには「自分で考えよ」ということもあったでしょうが、それ以上に、「あなたのものはあなたのものではない、それは『返す』べきもの、いや、あな

たの存在そのものも、あなたのものではない」ということに目覚めさせるものがあつたのです。

自分の力で何かできるといふ姿勢そのものを、イエス様は問われるのです。あなたはもつと謙虚になるべきではないのか。ローマに加担するとか、祖国に仕えるとか、そういう姿勢ではなく、そもそもあなたは無ではないのか。神によって無から創造されたものではないのか。この立場に立った時に、「カエサルか神か」などという問いは、どうでもよいこと。霧散してしまします。誰に借りたものにせよ、返すべきものは返す、それだけです。

この回し者は、そしてその背後にいる、支配者、律法学者らは、自分が無である、自分が「いない」という事実を愕然とするのです。敵であつた彼らが、次第にイエスに魅かれていく様子がこの後描かれています。さて、私たちはどうでしょうか。自分が「いない」ということ、自分のすべてが貰い物であり借り物であるということ、このことをどれだけ真実味を持って受け止められているでしょうか。もらつた命が、親からであれ、社会からであれ、神からであれ、それが初めから自分のものであつたような気持ちでないでしょうか。「服を着る」と書いて「着服」(ちやくふく)と読みます。自分のものではない人様の着物であっても、一旦それを着てしまうと、次第に自分にしつくりしてきて、あたかも、初めからそれが自分のものであつたような気がしてくる。これが着服です。私たちはいただいた命を着服していないでしょうか。

正直、私は、まだまだ自分が自分であるような気がしています。言葉も出ないほど驚いてはいないかもしれない。イエスの前で自分の本性に気づいた律法学者の域にすら達していません。それでもこの言葉をいつも聞いていたいと思います。詩編100篇、「主こそ神、主は我らを造られた。我らは主のもの、その民、その牧の羊。」



「ヘブライ人への手紙」から

市川 浩史

新約聖書の「ヘブライ人への手紙」は、とくに第十章一節の「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです」といった印象ふかいことばで有名です。田川建三氏によれば「或る知識人キリスト教徒―おそらくギリシヤ語を母語とするユダヤ人―によつて七〇年ないし九〇年の間に流暢なギリシヤ語で書かれた優れた著作」(『書物としての新約聖書』)です。

一八九七(明治三〇)年から約四〇年にわたつて群馬県西部の安中教会牧師を務めた柏木義円という人がこの書の注解書を一九二〇(大正九)年に著しています(『希伯来書略解』)。いま柏木の読みを参考にしてこの書の教えるところを考えてみたいと思います。もちろん、聖書に関しては素人である私がこの書について専門的ななかを論じてみようなどは毛頭考えていませんが、柏木が読んだ足跡に従いながら考えてみたいのです。その柏木は、「本書の主題」は「現世界と精巧に

対比されつつある「来らんとする世界」、しかもいま「来らんとする」とはいえ「其実に永遠より存在して居る」世界であるといえます。とすれば、この書の主題は、冒頭に挙げた十一章一節の「信仰の定義」に他ならないのではないのでしょうか。柏木はこれについて注解書に「信仰に由て見へざるものが実在となり、未来のものが現在となる・・・希望は未来のものを未来として待望する力なれども、信仰は現在の経験として味はふ」と述べています。つまり、現在のいろいろなことがらを現在のこととしてのみ見るならば、本来は見えるはずのものが見えないこともある、長い時間軸の流れのなかに流されるのではなく、後と先とをよく見据えなければならぬ、ということなのでしょう。そのように見、考えるならば、見えないものと目にみえるものとが明確に対比され、かつ現在と未来とが連続していることが了解されます。

たしかに見える／みえない、ということとはわたしたちの視覚の問題にすぎません。そんなこととは全く関係なしに存在するものは存在するのだし、わたしたちが一時的にこの世界に存在していることは無関係に過去と未来とはずっと繋がっていることがわかってきます。このように考えると、「ヘブライ人への手紙」の著者がこれほど深くて真実な視点を持っていたことに驚かざるを得ません。そしてこの著者がイエスを見ることでこそ、こうした視点を獲得できたということをおぼろげに感じられます。



篤い信仰を受け継ぐ

庄子 都

我が家を出てから佐伯先生宅に着くまで七時間近くかかった。先生の体調が勝れないとお聞きして、たまに上京の機会があったので「この際だから・・・」と足を伸ばして大阪に向かったのだ。

その四日前に中村美智子さんも空路大阪入りして、短時間だが面会がなかった。次々と懐かしい顔に出会い、先生は満面の笑みで迎えてくださった。二月半ばから流行性胃腸炎に罹患、食物を受けつけなくなり、頬が痩せて入れ歯が合わなくなっており、ずっと横になっておられたが、病人という感じではない。顔ツヤの良いのが美智子さんは印象に残ったそう。

今は娘の和子さんが同居して、夜半先生のベッドの隣で寝ながら、しばしば起こされる所用に対応されている。和子さんの長男一家が向かいの公団住宅に居住して、かわいい曾孫ちゃんがよくよく訪れるという。なんとも羨ましい環境の下、八十九歳の晴郎先生と八十六歳の淳子さんが支えあって六十三年間を共に歩んでこられたのは「神からの賜だ」と述懐しておられた。

伊賀上野での新婚時代に、妻をリヤカーに乗せて移動した（ふるーい）とか、仙台時代は毎日蕃山に散歩に行つて、木の幹に身体を寄せて生気を貰っていたこと、など次々話され「友遠方より来る、又楽しからずや」と何度も握手して別れを惜しんだ。

淳子さんは耳が遠くなってきたそうだが、背筋がピンと伸びて、やさしい口調も少しも変わりなかった。三人の孫、五人の曾孫に囲まれ、心豊かな日々を過ごされている様子を垣間見て、本当に行つてよかったです。佐伯先生は三〇冊以上の著書（翻訳含む）を出しておられるが、堅苦しくない文章から要点がしっかりま

とめられていて、とても読み応えがある。学校で教科書として活用されたものも多いそう。当教会では『佐伯文庫』というコーナーを設けて、著書を並べる準備をしている。当教会創立者の篤い信仰の想いは脈々と受け継がれていくべきであるから

教会との出会い

加藤 幹子

讃美歌の何番かも分からないけれど、いつの間にか口ずさんでいる私。我が家の娘達と佐伯牧師との出会いが縁で、夫の旅立ちを見送った後から毎週教会に出かけて行く中、教会の皆さま方の思いやりや気遣いという、目に見えないパワーに、少しずつ心が満たされている自分があります。毎週の礼拝の最後に早坂牧師の「いつも喜んでいなさい、絶えず祈りなさい、どんな事にも感謝しなさい。」の祝福の言葉を、心から感じて感謝致しております。



老朽化した時計台を、説教題を掲げる看板にしました。道行く人にも福音を...との願いを込めて、説教題を考えることにしました。

祈り

伊藤 節子

絶食のベッドの夫の耳元に

静かに読みし詩篇二十三篇

血の気なく細き夫のふくらはぎ

熱き掌をもていのりつつさする

まどろみて主の御まなざしの許に伏す

恩寵のひと日静かに暮れぬ

*伊藤節子姉は、二〇一五年六月三日に愛する伴侶秀志兄を、十年以上にわたる献身的な看護を経て天に送られました。闘病中も熱い信仰を胸に、ご夫妻で祈りつつ支え合うお姿を見る度に、私達教会員も励まされてまいりました。今は御許にあって安らかな秀志兄の心が、主と共に、片時も離れず節子姉を包んでおられるのですね。(由)

私の信仰生活と私の召命

竹花牧人

初めまして。竹花牧人(たけはな まきひと)と言います。私がどういう状況で現在まで生きてきたかをお話させていただき、自己紹介とさせていただきます。

生まれは栃木県の小山市という場所です。栃木県の中では二番目に人口が多い町です。曾祖父、曾祖母の代からクリスチャンで私は四代目に当たります。教会という場所は私にとって家であり、常に社会で軋轢を受けた時葛藤を感じた時、肉体、精神ともに癒しを与えてくれる場所です。日曜には教会の礼拝にでる、それは日常生活の一部でした。しかし、高校三年生にな

った時、精神的なストレスにより、精神疾患を患いました(診断名は統合失調症)。発作が起こると、体の震えや思考の混乱などが起こり自分の気力ややる気、体力など生活する上での基本的な人間の機能が奪われ、最終的には自分一人で生活することができなくなりま

す。大学にその状態で進みました。大学は仙台にある東北学院大学の文学部キリスト教学科という所です。この病気を抱えながらも大学生活を送れたのは、一人の友人のおかげでした。大学一年生の時に入った学生寮で出会った友達が、精神的に追い込まれた時に助けてくれたのです。この人は私の大切な親友で、今でも相談にもよく乗ってもらっています。この寮生活で精神的な発作は減りました。教会にも、この病気にもかかわらず一か月に一度は出席することが出来ました。大学での在学中、一年間休学をしたことがあります。それは音楽活動をしていいたからでした。音楽でプロになりたい。一時期はそう考えましたが、成功には人脈が必要という現実の厳しさに直面し、大学に戻りました。現在は趣味としてバンド活動をしており、東京で友人と時間のある時スタジオに入りドラムをたたいています。



一年間休学していたことにより、卒業するには、一年間で二年分の単位を取る必要がありました。経済的にも一年留年するのが限度でした。そのため、一年間必死に勉強しました。そのため生活はすべて授業で埋まり、就職活動をする時間がなく、卒業が確定しても、その先の自分の将来のことは全く見えてきませんでした。

そんな私を見て、キリスト教学科の教授が「牧師になつたらどうか」と勧められました。家系が牧師の家庭でも私の頭には、牧師になるという選択はありませんでしたから、正直ものすごく迷いました。牧師とは勉強をすればなれるわけではなく、一番重要なのは、自分が神様に召しだされているというのを確信することだからです。私には当時、神様に召しだされているという感覚はありませんでした。しかし、将来が決まらない…。迷いながら、まずは専門の勉強を神学校でして、教会にもきちんと行くようにしようと考えました。最初に門を叩いたのは日本聖書神学校です。しかし、この学校の保守的な傾向は私には合わず、年間聴講をしてやめました。その時、農村伝道神学校があるということを知り、受験しました。森に囲まれ、今までの保守的な教会生活とは一線を画し、私は自分の信仰生活と勉強をきちんと見つめなおし生活を送ることが出来ました。出席教会は東京町田市にある「原町田教会」という所です。会員数が150人ほどの大きな教会です。私も神学生とし、神学校日に説教を任せられたり、こどもの教会の分級の担当をしたりと活動しました。

自分の病気は良い方向に向いている、そう思っていた矢先、日曜日に急に息が苦しくなったり、体が震えて、止まらなくなったり、頭がパニックになることが頻繁に起こるようになりました。その原因は、神学生とは教会に行くのは当たり前、休むのは牧師として失格だという価値観からくる、強烈なプレッシャーでし

た。教会とは本来、心を安らかにする場所だと私は考えていますが、大きな教会のマネジメントされた、所謂組織としての教会は、教会の本来の安らぎをもたらす場所とはかけはなれていました。その教会に三年間かよい、組織としての教会はどうあるべきかは、多く学びましたが、教会の霊的な部分は十分に感じる事が出来ませんでした。その迷いから体調を崩し、一ヶ月のうち一回程度、発作を起こし休むようになりました。しかし、教会に行かずとも、自宅で、真剣に神様と向き会っています。

この経験から私は、教会にくるのは義務であるという組織論を展開するのではなく、日曜日にこられなくとも、神様はよしとさせていただきたいということ、そして、どんな時でも神様とは祈りで繋がっているのだということ、教会から遠のいている多くの方や、教会に初めて来られた方に、伝える牧師になりたいと考えます。日曜を休まない、牧師としての義務、組織の大切さ、こうしたこと考える前に、神様の前に牧師も一人の人間であり、決して特別でないということ、私は牧会のスタンスとし、自分の障害とそれを通して得た体験を神様からの召命と受け止め、これから歩みたいと思います。よろしくお願ひします。

(この文章は、竹花さんが昨年当教会で伝道実習をされる前に提出してくださったものです。今は当教会に転会され、牧師になるために準備をしておられます。)



この道

池田 道子

私は、この道を二十歳の時から歩みはじめた。若い日に神のすばらしい愛を知らされたことは、人生で、最高に幸せなことだった。自分で選んだこの道を、初心の大切さを忘れることなく、誠実に、一歩一歩踏みしめて行きたいと願ひ、教会に足を運んでいる。

ある日の愛餐会で、ご自分の名前の由来を語ってくれた方がいた。興味深く聞いているうちに、他の皆さんの話も聞いてみたくなりリクエストした。そこで語られた一人ひとりの誕生の秘話や、名前に込められたご両親の深い愛や熱い祈りを感じて感動した。かくも深い親心に心打たれていたら、突然私にお鉢がまわってきた。能天気な私は「何も聞いていませんので、わかりません・・・」と言ってしまった、今までのとても良い雰囲気の水をさしてしまった。すかさず「千里の道も一歩からだよ！きつと」大先輩からあたたかいお声がかかった。みんなの笑顔にも出合っ、今ここで、この道を、共に歩む仲間たちと生かされている喜びに満たされた。

古く『万葉集』で山上憶良は

瓜食(は)めば 子ども思ほゆ

栗食(は)めば まして俣はゆ

と、子煩悩ぶりを語っている。さらに「思い出す」だけでなく、片時も忘れない親もいる。

思ひだすとは 忘るるか
思ひださずや 忘れねば

と、室町時代の『閑吟集』にある。上には上があるものだ。

遠い遠いあの日、この道を歩む決心をして、両親に伝えたところ、おどろき、やがて喜んでくれた。日頃、子ども達の教育に関して、意見の不一致が多かった両親だが、この時ばかりは奇跡的と思えるほど意見が一致した。洗礼式の日には参列してくれて、新しい門出を見守り祝福してくれた。心から感謝している。

両親の愛、神の大きな愛に見守られ、信頼して歩むこの道は、喜びと賛美そして感謝の祈りに至る道だ。道端の可憐な草花に励まされ、これから行く道をゆくりと歩み続けたいと願っている。

兄弟、北より来る

庄子 都

今から十四年前、佐伯先生の最後の礼拝(イースター)の時受洗した小林俊樹さんが、所用のついでに教会へ立ち寄られました。当時東北大学薬学部を卒業して、香港留学直前でした。香港、米国滞在后、北海道科学大学保健医療学科・義肢装具学科教授として札幌在住、専門学会で知り合った奥様と愛息嗣門君(七歳)との三人暮らし。

彼は母上がクリスチャンだった影響で、幼い頃から食前に主の祈りを唱えたり、教会も通っていた時期があったから、仙台にきて学生センターに通い、バンングラデッシュでの体験、米国留学を経て西仙台教会に通うようになりました。大学卒業前の多忙な時期に休まず通ったのは、彼曰く、聖書の導きなのか、それともここでいただく美味しい昼食なのか、あるいは教会の皆さん及び佐伯先生なのかはよくわからない。たぶんその全てだと思うが、国家試験受験を除いて無欠席だったそうです。

佐伯先生に受洗を申し出ると「神のなされることは

皆、その時になんて美しい」(伝道の書三・一一)と

いう聖句をプレゼントされました。受洗の日の説教は【永遠に仕える者は、永遠に若いのです】『何と力強い言葉だろう、私もこれから「永遠(神)に仕える者」の一人になろうと歯を噛みしめた。ひざまずいて受けた先生の手の重さを忘れることができない。私の頬に一筋の涙がこぼれた。』(聖生富田林便一号より)

純粋な若者のひたむきな信仰心に胸が熱くなり、奥様もクリスチャンで、琴似中央教会に通っておられるそうです。「聖生」の中で、「自分で選んだ聖句は『人は心に自分の道を考え計る。しかしその歩みを導く者は主である』(箴言一六・九)

『神様のはからいは空気のようで目には見えない。しかしそれを感じることはできる。まるで風のように(ヨハネ三・八)。目で見えないものに価値を見出すことは決して容易ではないが、神様が私の中に働いて万事を益とさせていただくことを信じている。』と結んでいました。

現在は身体の一部としての義手、義足の機能を追求しておられますが、米国や内戦状態、又地雷の残っている国々で、必要とされることが多い現状を話しておられました。



イエス様との出会い

川村晴美

私が初めてイエス様と出会ったのは、小学三年生の頃だったと思います。下校時校門を出ると、見知らぬ外国人が赤・白・黄・黒の四色で作られた冊子を片手にイエス・キリストのお話しをしていました。「イエス様が雲に乗って来ます」との話に友達と「人が雲に乗れるの？」などとあまのじゃく振りを発揮しながら家路に着いたのですが、配られた冊子を大切に机の引き出しにしまったのを覚えています。

二回目の出会いは六年生の時に読んだ伝記「イエス・キリスト」です。その本を読んで感想文を書き、全校児童の前で発表することになったのですが、残念なことに内容は殆ど覚えていません。「パリサイ人は悪い人たちだ！」の一文だけが記憶に残っています(笑)。私は読書が好きで、高学年の頃は様々な偉人の伝記を読んだのですが、今思うと「イエス・キリストを読んでも」で賞をいただいたことは何かの縁だったのかもしれません。

それから長い月日が流れ、西仙台教会の「どなたでもどうぞ」の貼り紙に勇気を出してドアを叩いたのが三回目の出会いとなります。クリスマスは教会でイエス様のお誕生日をお祝いしたいという願いが叶ったのです。

そしてこの十数年、いつ礼拝に出席するかわからない真面目とは言えない私を、教会の方々はいつでも温かく迎え入れてくださり、受洗まで導いてくださいました。聖書の学びもまだまだこれからのわたしですが、どんな時も共にいてくださるイエス様に心を委ね、信仰の道を歩んで行きたいと思えます。

弱くは強く？

早坂 由美

「主よ、わたしを強くしてください。」何万回祈ったことだろう。洗礼を受けた一六歳の時から、なにげない日々の朝な夕なに、悩み事に心が折れてしまう度に、そして、くだらない些細な事柄に、いちいち傷つく自分が、不甲斐無く情けなくなる度に、心を太字で書くような、そんな強さが欲しいと願ひ祈った。

だから「主よ、わたしを強くしてください。」頭のなかで言葉がリフレインする。「強くしてください」と祈りながら、弱い私、ダメな自分を否定し続けた。「もっと強くしてください、例えばあの人のように」と、周りの人を妬み羨み、渴きに似た痛みを感じながら。それは何時までたっても叶えられない祈りだった。

ピリピ書一・二に『私にとって生きることはキリストであり死ぬことは益である』とある。有名な聖句だ。長い間この聖句の意味が解らなかった。解らないのは当然、不信仰にも神様を心の支えかサポーター程度に思ってきたからである。しかし人生の秋を迎えたこの頃、夢や希望であり、ある意味どこかで執着してきた事柄を、思いがけず手放さなければならなくなった時、やっと了解したのである。考えてみればとても当たり前でシンプルなこと、『人は何者でもない』ということを。

「生きることはキリストである」とは、「私」はすでに死んでいて私の中に「私」はいないということだ。これこそが自分の人生だと思つて握りしめていたものは、霧のように立ち消えてもはや私の手の中にはない。「主が私を生きてくださる」もっと言えば、弱い私を生きたために「主」自身が弱くなつてくださった」ということである。思えばこれほどの強さがほかにあるだろうか。

祈るってなあに…

園川恭雄

今回のテーマは「私の祈り」ということですが、そもそも「祈」という漢字の語源は何だろう、英語の「pray」ってどういう意味があるのだろうかと思いちよつと調べてみました。「祈」という漢字は「示」と「斤」を組み合わせて作られたもので、「示」は神が降臨してくる祭壇を意味し、「斤」は手斧の刃が物に近づく様を描いた象形文字ですれすれに近づくという意味を含んでいるそうです。英語の「pray」は「祈る」という意味だけでなく、「熱心に頼む」とか「心から願う」という意味があるそうで、私の大好きな推理小説「シャーロックホームズ」には「Pray sit down」という表現がよく出て来ます。この場合の「pray」は「どうかお願いですから」とか「どうぞ」という意味になるそうです。そうすると、「祈る」とか「pray」というのは、それは神様に近づき心から願うという行為になるというわけです。味わい深いですね。私たちは窮地に陥った時には我を忘れて右往左往してしまいます。自分に自信がなくなり、その弱さ故にしばしば他人を攻撃し傷つけてしまうことがあります。しかし窮地であればあるほど、私たちは「祈る」という行為を実践しなければなりません。「祈り」によって、私たちは、神様が共にいてくださるのだということ、あるがままの自分をそのまま受け入れてそこから新しく造り返られるのだということを実感します。「祈り」を通して神様に立ち帰ることができ、「やさしさ＝愛の心」が芽生えてきます。「祈り」とは神様がまさにすべての人に分け隔てなく与えてくれた「賜物」なんだなとつくづく思います。

キリスト教主義学校での体験

中村美智子

今回の教会報はテーマが示されました。今までも語ってきた話なのですが、『自分の教会生活の初めの一步』でも思える体験なので、書いてみます。五十年以上も前のことです。

短大の入学式は入学式礼拝で、もちろんセレモニー感満載なのですが、その上に礼拝と言う特別な雰囲気がありました。オルガンの奏楽により始まりました。一番最初に共に賛美したのは、旧讃美歌「452番」、三番まで謂えて着席しました。一番の「…為すべきつとめあれば、雄々しく、強くあらまし…」、この個所が自分の心に強く刺さりました。為すべきつとめもろくに考えず、雄々しくもなく、強くもない現実の自分を恥じる思いでした。けれども不思議に心が次第に落ち着いてきました。否定でなくて、『この私のもとに來なさい。』と招きの言葉が添えられましたので。

その次の日から学内の礼拝に出るようになりました。夏休みに帰省をし、地元の教会を訪れて、卒業後は実家にいる約束なので、地元の教会で洗礼を受けたい旨をお願いしました。無牧の状況の教会で驚かされました。

洗礼は地区内の牧師先生が夕拝に来てくださって、受けたところから教会と私のつながりが始まりました。数年後に「我と汝」という説教を聞きながら、あの日、あのときに神様が道を示してくださって、招いてくださったのだなあ、と思いました。信仰生活は長いのですが、『三つ子の魂』も健在で、自分の描いていた信者像(?)には、遠いと思っています。けれども主に従って生活ができる感謝と喜びの人生は、あの日にいつもつながります。



「祈り」を考える

矢口洋生

人間とは「くする」存在と云って人間を定義する場合、いろいろな仮説がある。「考える」「悩む」「言葉を発する」「火を使う」など、見方・考え方によっていろいろ当てはめられるから、いろいろな定義が可能と言える。そのなかの可能性のひとつは「祈る」だと考える。太古から人間は歌をうたい、祈りを捧げてきた。祈ることは人間のきわめて本質的な行為に思える。祈ってこそ、人間なのではないか。

しかし、改めて考えてみると祈りとは不思議なものである。なぜ、なんのために祈るのか、それを明快に説明することは難しい。なぜ夕焼けを見たくなるのか、なぜ青空を見上げたくなるのか、という問いに無理やり答えるようなものなのかもしれない。でも試してみよう。

祈りは自分への問いかけでもある。祈る時、たまたまを整えずにはいられない。祈りは内省的行為なのだ。したがって祈りを通して、人は自分自身を確認しないわけにはいかないのだと思う。にもかかわらず、祈りは自分に向けられた声ではない。祈りは自分との対話ではない。自分に祈りを捧げることはできない。そのような人は自己陶醉者に他なるまい。

結局、祈りは自分の内側を抜けて、自分以外のなものに届けられるものではないか。つまり、祈りは自分のなかにいる「絶対的他者」に向けられたものではないか。「絶対的他者」というのが分かりにくいとするなら、「自分のなかにいる自分とは本質的に異質な、自分を超えた何者か」とでも言うべきか。ゆえに、祈りをコントロールすることはできない。それは自分を超えた存在に届けられるものであり、究極的未知とのやり取りなのだから。祈りを通して、自分の思い通りに事を運ぶことはできないのだ。祈りによってご利益を得ることはできないのだ。祈りによる自己実現などナンセンス。それは祈りを私物化した自己賛美と変わらない。

自分のなかの、自分を超えた、自分とは決定的に異なるなものかと言葉を交わし合い、それによって驚かされ・苦しみ・反省させられ・慰められ・生きる勇氣を与えられ・新たな世界を示されること、それが祈ること（少なくともその内容の一部）なのではないかと考えている。祈ることによって、人は本当に人になつていくのだ、そのように考えている。

私の祈りかた

早坂文彦

その一 主の祈りの一語一語を風呂の中でじっくり祈る。（この頃はやっていない。）

その二 苦しい時の神頼み。

その三 説教を作りながら、「こんな箇所から、何を語れと言いますか？」と。

その四 幼稚園へ行って仕事を始める前。

その五 朝起きた時、詩編を読み、新約を一章読む。

それで起き上がる勇氣をもらう。

その六 夜寝るとき。すぐ眠くなり、実は祈りどころではない。寝付けない時に、「そうだ、祈ろう」と思うと眠れる。

その七 朝と夕、妻と祈ることになっているが、けつこう忘れる。

私の場合、聖書を読むことと祈ることとは切り離せない。とくに詩編はそうだ。実際どう祈ってよいかわからないこともあり、また、祈りで始めたことがいつの間にか、一人で思いを巡らすことになってしまうていることもある。そんな時に詩編が役に立つ。詩編はわたしの祈りを代弁してくれる。とくに自分の思いとぴたりくる言葉があると嬉しい。励まされる箇所には線を引いておく。逆に、こうは祈れない、祈りたくはないというところもある。ところが不思議なもので、何度も読んでいくうちに、その深い意味に目が開かれる思いになる個所に出会う。

ちなみに今日の出会いは詩編二八の六、「嘆き祈る私の声を聴いてくださいました。」わたしの嘆きは「声」に過ぎない。私の実体は「声」ではなく、「わたしの力、わたしの盾」（八節）である主である。そう考えると、自分の嘆きに圧倒されずに済む。今朝はこの気づきで立ち上がることができた。

編集後記

今回の「秋桜花」は各自の祈りについて、また信仰の思いを自由な観点から書いていただきました。教会は一人ひとりが神様と向き合う生活なしにはあり得ません。神様との交わりのない、ただ人間同士の交わりだけでは教会は成り立たないはずです。教会が古来礼拝の中で唱えてきた使徒信条が、「我はく信ず」と1人称単数で始まっているのも、個人の信仰が重要だからだと思えます。

牧師としては、人数と献金に現れる教勢が気にならないと言えそうですが、また昨年行なった講演会のような外部に向けた活動も教会の力の表れと考えたくなります。けれども教会の真の力は神様にあり、その神様と一人一人が結びついていることにあります。ですから、教勢や華々しい活動に目を奪われることなく、祈りと説教と一人ひとりの魂への配慮に専念したいと思っています。

その意味で、今回皆さんが、それぞれの思いをつづつてくださったことには重要な意味があると感じています。一人ひとりの人生に神様がどのようにかかわつてくださったのか、祈りについてどのようなことを考えたのか、こうしたことの証として、じっくりと味わいたいと思えます。（早坂文彦）

